

HEALTH PROMOTION PLANNING
An Educational and Environmental Approach
2nd. ed.

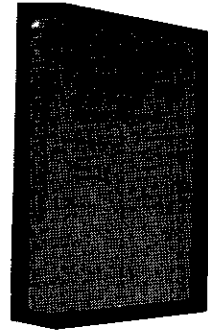
by L.W. Green, M.W. Kreuter

Mayfield Publ. Co. 1991年 506頁 9,506円

本書は、「情報 (information)」や「健康教育 (health education)」ではなく、「教育 (education)」に重点を置いて著述されている。すなわち、個々人のレベルでリスクを減少させるための知識や技術を提供するという視点ではなく、社会的なレベルで健康増進に好ましい環境を形成する施策をいかにしたらうまく進められるかという観点に立って、著者は住民 (有権者) の「教育 (education)」の必要性を述べている。住民への「教育」不足からその支持を得られなかったばかりに、公衆衛生的に望ましい多くの法案が廃案となった過去の状況から、著者は「教育」の必要性を痛感するに至ったという。初版で扱ったサイエンスやテクノロジーに基づいた健康教育から脱却し、政策的な次元での健康教育が中心に述べられているのは、そのためである。

さて、本書では、ヘルス・プロモーション・プランニングの構成上重要な二つの要素を紹介している。一つはニーズを把握するための分析相で、もう一つはその先にある履行およびその評価の段階である。頭文字を取って、それぞれ PRECEDE (predisposing, reinforcing, and enabling constructs in educational/environmental diagnosis and evaluation), PROCEED (policy, regulatory, and organizational constructs in educational and environmental development) と命名しているが、この PRECEDE-PROCEED モデルに基づいて本書の内容は展開している。

PRECEDE では、①社会 ②疫学 ③行動と環境 ④教育と組織化 ⑤統治と政策という5段階の分析相を示しているが、いずれの相においても、具体的かつ体系的にヘルス・プロモーション・プランニングの進め方が記されている。たとえば、②疫学的分析では、問題となる健康事象やリスク・ファクターを特定する方法だけに留まらず、ヘルス・プロモーション・プランニングの対象をどのように選定していくかという点



にまで言及しているし、また③行動と環境の分析では、介入を行って最良の結果を生み出す行動や環境を選択する方法を重要性や可変性といった基準を用いて示している。

こうした行動や環境に影響を与える④教育と組織化の分析が次の段階として続くが、行動に影響を与える要因を「する気にさせること (predisposing)」「できるようにすること (enabling)」「増進させること (reinforcing)」という三つの範疇に分け、前者では人に、後二者では組織や資源にプログラムの焦点を合わせることを説いているのは、興味深い。

⑤統治と政策の分析では、必要とする資源、現有していて利用可能な資源およびプログラム履行の妨げとなるものを評価して、政策、法令および組織の創造・改変を進めていく。この間に分析・計画の PRECEDE から履行の PROCEED へと移行するのであるが、それに伴って、実際の状況に応じた柔軟性が必要となることも著者は十分に指摘している。

履行後の評価についても、その必要性が実践者の側からも述べられており、しかも、どのような要因により変化が生じたか (process)、行動や環境がどのように変化したか (impact)、その結果として健康や QOL (quality of life) がどのくらい改善したか (outcome) という三つのレベルで細くくなされている。

ヘルス・プロモーションの重要性・必要性が広く浸透してきたにも拘らず、そのプランニングに関して体系的かつ実践的にまとめた著書は少ない。また、本モデルが単なる健康増進に留まらず、QOL から出発し QOL に終着している点も、公衆衛生に携わる者が忘れてはならない視点であろう。企画・立案者から現場の実践者まで広くお薦めしたい本である。

石井敏弘, 中原俊隆 (公衆衛生行政学部)